

10/28 (木)

2010年(平成22年)

新潟日報



発行所 新潟日報社
本社 千950-1189 新潟市西区善久772-2

題字 會津 八一

第24390号

私は2008年冬、原因不明の病で入院しました。

突然始まった指先のしびれが強い痛み
に変わり、入院するころには右腕は完全
にまひしました。握力はほとんどなく、
左足もだらりと垂れた状態に。筋肉が落
ちて体重は減り、立っているのもやっと
でした。

医師から「立てなくなる可能性がある」と
言われました。ほんの少しだけ、アダ



プティブ(障がい者)の
人の気持ちに近づけたよ
うな気がしました。そし
てアダプティブの人にア
ウトドアを提供する仕事
について、あらためて考
えるきっかけにもなった
のです。

病室の窓からは遠くに
雪山が見えました。本来なら自分がその
場に立っているはずなのにいけないとい
う悔しさ。体が思うように動かないもど
かしさ。もう白銀のゲレンデや緑のフィ
ールドには戻れないかもしれない、と考
えました。

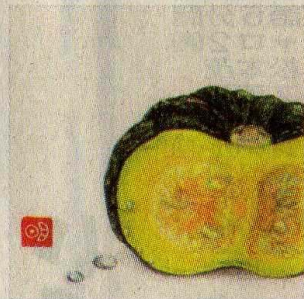
そんなとき、一人のアダプティブのゲ
ストが教えてくれました。「あなたのやる
べき事は現場だけではない。身体は動か
なくなっても、できる事はたくさんある」
現実を受け止め、悲観せず、自分には

天職、そしてこれから

何ができるのかを冷静に見る。今まで偉
そうに人に話してきたことが、前向きな
生き方として初めて実感できたのです。
心が吹っ切れました。

退院後、ゲレンデに再び立てたとき、
経験したことのない喜びに包まれました。
今になって、病はこの仕事为天職だ
と私に教えてくれたのかな? と感じて
います。

私たちを必要としてくれるアダプティ



ブらたくさんのゲストに、もっともつと
この地の豊かな自然を伝えたい。みんな
と同じ場所で同じ時間を共有できる喜び
を知ってもらいたい。自分にはまだまだ
いろんなことができる自信を持ってほ
しい。

ゲストとのさまざまな体験をつづって
きた8月からの連載も、これでお別れで
す。これからも一歩ずつ進みたいと思ひ
ます。仕事の重みを自覚させてくれる、
後遺症のしびれと仲良くしながら。